

明治25（1892）年～昭和22（1947）年。東京に生まれる。大正5（1916）年東大建築科卒業。陸軍技手、警視庁技師を経て大正11（1922）年内務省技師となる。帝都復興院及び復興局技師を兼任し東京・横浜の震災復興事業では笠原敏郎、野田俊彦らとともに土地区画整理事業に携わる。その傍、日大高等工学校そして工学部で教鞭をとり、昭和4（1929）年には区画整理事業の経験を集め大成した『土地区画整理論（主として技術的考察）』で工学博士を授与される。当時、区画整理に関する研究論文が少ないので、その研究はめだっていたという。これは「土地の建築的利用上」合理的な画地割の大きさが定められずに実施された復興事業での反省にたち、住宅及び商店の間取、採光、経済的効果などの技術的考察を通して我國土地区画整理に「一敷地の大きさ、一区廊の大きさの標準・設計基準づくり」を根拠づけたものであり、注目すべき業績であった。

同年大蔵省営繕管財局技師、14年工務部第二技術課長となつたが、臨戦体制が強化されるにともない鉄鋼資材の使用が制限をうけ、官庁での仕事がなくなつていった。昭和16（1941）年佐野利器の紹介で鹿島組（現鹿島建設）取締役に就任し、同年常務取締役に就き竹内六蔵副

社長の後継者として将来を期待されていたが、戦後間もなく亡くなつた。当時同社社長であった鹿島守之助によれば、佐野は「貴方が伊部君に目をつけたことは、100%以上150%ですね、あれは実際に立派な人物だ」といっていたといふ。

その他の活動は佐野に師事したことから構造が専門であったが、昭和7年には建築学の教科書として『建築学大意』を書くなど建築全般に通じており、建築学会では各種の委員会で活躍していた。

大蔵省時代に伊部の部下であった故藤田金一郎（初代建築研究所長）によれば、「性格は非常にほがらかで、役人らしくない役人、難しいへりくつを言わぬ実行重視の人であり、指導力があり、理論に強く、決断が早く、しかもそれがピシャリと決まる好判断を下せるまさに英断の人」であつて、「生涯お目にかかるないほどの人」であったといふ。また、藤田が佐野利器宅をたずねるときには、伊部がしばしば話題にのぼるなど佐野お気にいりの弟子の一人であった。

